

清松の調四編卷之下
談

江戸 为永春水著

第廿三回

と と
稻戸門の朝七
生人野を云材一
絆多所一連も今
ふ 捩の聲を外送
ま ま
車こそも
う う
あれども狀く

腰を纏て進うの念へ鞭びと漢刀と轂紙て冬
廓へ立候り那に個の幫間のそむふめりてまく
改めて洒ふされば「先毫でか毛ぬさんのおの
駆り善すり肩尾り腰やくそくら呼ひ姿をてけ
産めませう子」ハイ寃ふか産めで産めとがうし
まうみを捺ぐるまきとヨリハふか希きえどか二人のかけ
人で轂紙まで種せても喜ぶまくこの二女肩引も
廣く外支からどぞみふう西服ふどぎあるまくこせんく

送りの人と歓にて仕舞（あと）ばらの内漏（うちこ）をさりでとざわ
まきをうらり和車（よしゃ）に茶房（ぢくらう）休めふ更味（うま）く一（ひと）か參（あが）んな
もうそトさひま（ま）ヨ 一（いっし）毛（け）をうるる麻（あ）付て娘（むすめ）數（いそぎ）やすを
駕（え）り五八（ごは）や參（さん）がひ参（さん）さんのか屬（つき）と小藝（げい）をと（と）
か目（め）ふ御（みや）とまじして轟（とどき）りやまと、ウ和十萬（わざとまこと）、
か（か）た板（いた）でござわまきと五八（ごは）が唯今ふ百眼（ひゃくめい）とお、
御（え）りそうでござあまきと「あうも五八（ごは）の記教（ききょう）の目玉（めだら）で
石眼（せきめい）とまうとつのでござわまきとうら古今を教（まなぶ）サ子

秀義ひでよし「伊ふの食え眼くめが一ひとあよふぞともうとみでじさわ
まもとまもと「かくはおいのらがまくいのらくお様さまへまくまくてつれて死死して
死死てあるとあつてんいんよねなるあるとりふせばばグ初はじ
まうてうらからひ身みの月つきの底そこもううしが義ぎ父ちむむれ
やアあねあらうかうええてもひ身みの月つきへあちちりりあく
りとおもも作ぢかぢ方ほうのめ目めが墨すみの燒やサねね人ひとか邑む
さんさんををうでぞきおませませう「ややくもア毫ひ小こ宣せん人ひとソレ
ええさうさう那なききううざきざきと彼かれ是これのよよののままる遼りょうの源げん

歌とりふきのさ先あつ月船の室のさゝ八代月
主八うも「一目ふ傍う遠摩うみう」「史ふ続ひて 前
のへた」「手やうまういれ送とがきのアホ」「ナニお殺のり
れ送とよやアキラうて月送とがきのどらう」
あく「アホ」「史でもひ男ハ目の大きのづ毛取ふ旅
つて且お方の山見廻ふかうまきうちめでどぎあまん
トうの山のうちふ疊のきうめうあくべ」「トキニ 伏
あ や づ さ き
ゆごんああふ別れて大肩れざとすわとおれの仕

方ちもあつやせうちがまアさうざきすさか壱いと改かへやせうち「

是まアあぎぎとまはまのまとまれまのま送よのよ人じのじねねををふふききううてて

か月ゆかか交さ渉さででたたききふふ參ま辟ま「ま一一清きさんさんかかううえ

ハハててのの旅さ加まへへととんんごご機き械げ工こう手てでで丈まはは絃ゑ良らのの確か」かううえ

史しのの古古舊きててどどささかかままととヨよ「まハハテテ子こそそややアア何な卒そえ

又またわわででどどささああままととモモ「モシモおおももううんんそそんんそそんんままりりととちち」

ももつつももややアアひひまませせんんゼゼ「ナニナササ宜いうう甚ひ孝たややままももううまますす」ひててここよよ

深ひくくてて葉葉つつてて浦浦んんヨヨ久久ももさんさんのの心心死死ををふふももろろのの確確」かううえ

お月ふをるのどりよ申す
お色やそんまふ隅の方へ送
ひうてお出まをうるみ一辰かよりかたまさんのおねま
わまハ大方ままつ、居あるごらううか物ものをもつておをよ
むか「ア慈さうるみきまきよエサア鶴岐遠方かわらんこうちへお出でまとヨ
キかアイ私まきやア寛ゆうほまさんまねれとまれれとまうと
宣うきうりううあんもううの嫁よとまをまのめのゆゆううをあう
ききをき「鳩岐くわい一いつををやせうううアイめきぎづづざざます
羽は
コトサ 今ま月つきうちうちおお互まみみおお互まみみ繋つなみみすすののごごヨ

ホンニ^さもくざまを子エ「ヨウト^さおうざまをどん宣^アハヨ^ア」
ト^トの根^キも茎^{カク}をうとあうても癖^{クセ}ふきのものであります

もくづまいたとちよと苦勞^{くらう}「ざみをヨドカラシ」
ト^トイエサ^スだん^ルま人^{ひと}でも余裕^{あすき}不^よ常^{じょう}鳴^なるまぐ^ル廊^{らう}云^ふ事^{こと}

ハ被^はねてわでをぎあまモトサ「ア宴^{やう}ふふ然^{ぜん}うで

あづまき^コ私^{わたくし}きんそむ女^{めの}かみえのまつりやうのび移^うう

つそ承^{うけ}まきそろひまゆりまご^{あつち}ふ小廊^{こらう}の云^い葉^葉とひひ^{とた}キ

ちやア笑^{わら}ひまゆりまきんホ^{タチ}「ハ幸^ラ是^シれがひひとん

びふれとつけとひづてがあつち「まヨドヤア宣
ませんゼメモアヌトヤアお男ハニと云んざえもえ
ち「ソレ又タマざゑをドヤア宣ハシキませんハ子ハシキト物ハシキうゞハシキぬ
まハシキ最ハシキ中ハシキは家の女ハシキ中ハシキあひそハシキ二時ハシキのくちうハシキ
服ハシキ「モシも連ハシキまえがしる入ハシキまハシキ」「ハテナ空ハシキうハシキもの
連ハシキ中の代ハシキふ連ハシキとちりちやアタフサハシキどづハシキ「イエ軒ハシキ」
ちハシキと云ハシキあうまきとヨ。アノウスハシキもア船ハシキを奪ハシキて
壁ハシキと云ハシキあうまきとヨ。アノウスハシキもア船ハシキを奪ハシキて
らうよハシキ「ヘイ左板ハシキ」モどぎみのまきとモ「そきドヤア車ハシキふ送ハシキ

まかづの
えがき
うきよ



お 雪

お 月



奴へとまうしても是と「ハイカ」とまつまると「私」

まあ
あくまきト続ひてアヘアリテ乃一ヶ種々ニ段入

あふ
揚りあり「モシもむぬさな大さうがああと氣で變

あまも「シんぬが振つてお出のえ」「ハイアキモお出

まきまく。サクく吹きぬか遠くもあへまーとづらも

れたり。先次序と先ふきてお駕馬若志も和猿も精

あきむねふりまでもあるじやーと揚りまくしが

網松一清の怡うとて「イヤア是い事はん毫ふる

後まほと子モモ「十三かもめが暮れて那ナカと云ふ所シロて重
やとう那ナカ紫苑シモツイ和尚ハサウとれんで毫丈ハヤシの女メイ守連ミタマと
ありありて一般ヒトスレふ猿スルで來キムやシトりうちアリ宿スルふ
歸スルて更マサニふせりの接移ソシギみどりもみを細スルねへむ書シテ
の教マハか和弦ハグか來キムと連移ソシギされスルと女房メイブみづミズのとや
ちときトキさシテるの毒アザふそカモすふ一イチ壁マツシに比年ヒイハ仰アガ紫苑シモツイの湯ヨウの窓カマ
食エサの外スル鏡カミをな方カタへ拂アフいでと人ヒトふもよりと女房メイブの
まモ志シふもよりと身カラづかとあとアフりよりとあアフる萬マツふ別ヘタ

潔支^{きよし}まへるをふ面伏^{おもて伏}うふ今大^{おほ}きと引^ひ合^あされて
か林^{くわ}の木あま志^{まし}の木^もと^とり^とび死^死云^い候^うもう^く顛^{ひん}
と^と極^{きわ}き^き痛^{いた}のと^と支^しと^とあ^あて^てか毛^けの母^の笑^{わら}ひ^ひみ^ごら
遠^{とお}方^がと^と射^ひ一^一箭^の松^{まつ}さん^ふも^も一^一箭^のさん^ふも^もひ^ひ法^{ほう}
ふは連^{つづ}津^つと^と東^{とう}次^じ所^しひ^ひ言^い分^{ぶん}て^て送^{おもて}射^ひ一^一处^の不^ふ築^たとの^との^の
能^{のう}令^{めい}が内^{うち}義^ぎさん^へある余^よで^ゆ居^ゐの内^{うち}の毛^け射^ひ入^いれ
毛^けを^をうちも^も難^{むず}か^か解^{わか}り^りと^とり^とと^とぞ^ぞア^ア突^つき^きづ^づく^くで^で射^ひ
きつて^て又^{また}と^とび^び退^のの切^きろ^のと^とき^きと^と處^{ところ}が^が衣^き支^しと^と難^{むず}

らまく 情念でもうううんばを取る事があつて
とを 漢族とやひて 繁ぐるもか鷦^{セキ}さんや^{セキ}もさんで
まいすりもはて居りまもうちとして強^{スツ}く立^{タケ}てゐる
今取^リはさんと遠^{アリ}めに集めても氣已^{チハシ}ふ^ムことをまちと
私の天^{アメニ}意のやうふれく納め^{ミテ}いのとくにぎわぬをうち
の卒^{マサニ}皆^モさう^ルが是^{ハシ}く況^{シテ}財のやうふれく和食^{ヌカフ}野^{ヌカ}を
て且^シ取方^トと大^{アリ}ふ^レそ^レを^レまも^レヨト^リふ^レ所^トと
甘^シふ^レそ^レ雅^{ハシ}も^レ謡^{ハシ}ふ^レく^レ空^{ハシ}と^レ夷^{ハシ}一^レお^レ船^{ハシ}ひ

えとすう組ふ「毫木おおきゆさんのか樹方へエ一達
さん ま ト ど 烏 まと
「 実木聲入ゆと海面目次序もれ人狂屋
サ子。トキニ葉花離へ遠處まで來やのでござ
まを久 ま ト ど う せん き
「 二 国船で來やとが姫の美行へ毛波新
と歸て來りと多くて向眾多く別是とゆく事
大 ま ト う か ま い く ま ぎ ま ぎ
きと氣りやせうト呼 も 入來る葉花 「イヤア毛
強さくは拂ひひで先今腰へか月歩くとあきふ連射
射 ま ト ま い ま い ま い ま い
「 と私由は本の初編である後新と跡き」と

在うりで いかを沙汰と歎して居りやへと いや支へそもと
先まで私わたくの羽翼はきと改かへまくと 良よふいはさみさみ
税義ぜぎと互ひに難むずいござわままくと （謂） や
輕けいく川かわの勞なとをすこす（葉） や支しふ税ぜておゆゆ があ
すそとすく（解） ほん（不） 代だいでもござわません（は） えふ辱そんすか私わたく 依よさ
先せんの一解（ひげん） サ川かわ左さ知しの妻め ままち（口） ままら（口） ままさ
と歎あゆく あゆく（口） 先角せんかく 稽しきと全ぜんふあす（口） とりと 目め 管かんをうり（口） と
空そらををままりと川かわ筋すじ送おどさん（口） かかとと がが吹ふきええままつつ可べ

嫁よめそちふ夢ゆめうりゆまうら空そらの金かなと且またお門もん

どうぞあるうちから物ものを譲ゆて遠方とほへまひや

どうぞあるまいろとお作つくまきとくら歌うた経き母ののゆふ能のう

あやア望むねと私わたくしも妙めうて居ゐるありありをかよば

どうぞ出で森もりやすきとくら歌うた経き母ののゆふ能のう

あんあんきそくきそくのをを欲ほ張りこひりそろひつて一い番ばんやものと

さんさんうりうりと付つて十じああでまと切きらせと仕つかせややと

あんあんと人ひとをちをうれしきのとじがみがみまも

うちか続と多きが仕作おとまあらます
「アサ榮光さんそんみ

トえんえと此いふかまいトよア賀りやご子エこゑ榮めいハナニナニトトモ

をもぎもきもは根ねとと見みふ心心入いれ意おもせせそそををううねねと

且さ般だん方がたとりとりと考かへへ食くひひそそぐぐててききわわへへででじじざざあ

ままそそ、ウウかかねねどどんん驚おどろくくトトよよアアねねくくうう「ホホニニ驚おどろくくそそででじじざざあ

ますまそそうちうちふも私わどどものもの且さ般だん考かええままハハ物もの達たまつききのの

且さ般だん考かええままののとと物ものともとも思おも一いったたままききんんううか面おもてが

かか脚あしくくぎぎののままととヨヨくく「ううごごねねままををジジかかんんすす、すすすすみみ

ひどい事やうざの様金 桜花さんお茶のまゝに
トト 真 実ふ支とつて大安ふと改一やくへりうち脚 ふ
脚がきりて産婆へりゆ 猿ひけり

第廿四回

あさくわん あらこあら あはぎも あじとんさん
モ附に個の弱間へ榮光ふ對ひ 史是ひ大人今隠
でくらく 芳勞さまでござああ せんじ先刻うしゆ接拶と改一
まそのござああ とがお咄づ切とまうきえぞうら
榮 トト そろ そろち 不良へお拂ひでを後ひまうおりお目ふるひや

えんごも「業^{きわ}先生へ寛^{ゆる}ふむせ車^トト^セア^トリ^トがふれり
ひまぐせんまがづ
まきうてうら一隊先生振^ふがとくかきんますちくやうで
じざかまきもせ業^アく又あざて 二町目^マヘでも引^ヒ
こしむ義^シ勝^ハのほをとど^ゼ秀^ジ「ホンニ私モ^トもあ伏^フと枝^ハよ^ハと^ハが
まうを^ヤらけ^ズあざんこえむ^ム。相^サ子^ス「そりうれ^ハ相^ハ
れ業^アの滑^ハり附^クかまく今^ハ年^ハ業^アま^ハ、
まく面^ハ白^ハも^ハよ^ハか^ハと^ハお^ハれ^ハ。相^サ子^ス「^キそりうれ^ハ相^ハ
ぬ^ハそ^ハ叫^ハめつと^ハお^ハ業^アやせん業^ア先生^ハが^ハこん
ま^ハあ^ハ業^ア、^カな^ハう^ハも^ハう^ハと^ハお^ハえ^ハと^ハあ^ハの^ハご^ハあ^ハま^ハ

まう 朝 ラツトモ西へ東あそバアハモ陣とうちゞま

まくまくひも ちやくともひも あらわどもももも
まゆゑをすで 宮ひよやアヤタラ得余私面をももき

ま ゴ子トキニ浦とくくわ角ももあさんのお作と

さま 佐助びんの大津繪絵が何处へは舞や」と

コウそんまふ鶴の方へ飛もとて狂舞ちやア直わへせ

依イエモウ大醉でまうむうめごと解ましん 清コレサ

きみ 無ふ醉と振とみうて舞され 一 ラヤお色え

さす 依助びんが確びぬまうのでどもあまもとうへ もう
依助びんが確びぬまうへ

おふ可笑しもうとざあまきう　ヨリ　ヨヤ　おもうでとざあ
まもそろい移さんえひどやアありませんうエ　ア、
私由物事えくとどきあまもてフエ　ツレク　多々嬢さん
遙のれをとどきう　踊つてお月ふをるヨモニモモモ
うむりうあるわる　「秋物さんち和が踊るとねを
ゑきこ」　さすり　身あり　や
裳丸子ふ踊らせりうち遠く　門とまくらうもく
室ひよ　身へまく迷惑すゑな作とゆりう物で
ござあまもと私やア　ねま屋ひま浦とおどきま

と金毘羅らをと致さなして是これではあり

妨むだきふきやことのざう確く一切かくわあわでとざわ

きもとく和わえり更かに何なれども第とトドま

踊おどと體からとが取とるもア物ものねねでどよおほきう

手てイやくやうよう踊おどらね人ひと方かたが宜いハサ漏もろる紫し

金きん持もち久ひくゆきとりとりみみりりあありりめめととくく今いまやア

きえの西に居ゐどどハテ驕きる年と暮ぐれーとと暮ぐれの竹たけトサ

相ああんまりまり重ひいせあん年と附つき今いまきき業わざの

すら構りずの御若きの方が宜うらう

「紫苑

おれとお様とお紫苑へ向候ごみまえ紫苑やゆづと

おの後又お西房が此處のでござるまをう西房やまと

置くよお承方ど細イヤ又味にとので行むの

嘆の方と西房きくと仕舞とサアく強肋ごん

やううトシようちを考へトトシ之強と大

よも御ふと今せと喰ひかまうが依物もほー之

らまそ一疊様様おお葉と物をあて紫苑とめ



大河内
七
曾
交
美
君
義

は
ら
り



とあがて安樂ありふ確せ男にハの間が卷
の巻をあたびて大變ざれりひとうすの根も
あ丈もくわく矢竹より列み根とむきを皆根
が別と取ぬとくとゆるうべ
集て大もんが身更よりか色と申すの一件
また死んで死へぬうへ翻七つともちあひ
とあるがゆきそひ多くひ集め纏めゆくの
まえゆふ量と身更きを況ねの根みさせ

うるより恐てふ邑の母のふ別されべ、ま
あらうだ
けを母と致ひて祝のやうふそよとモ先ふ承
て一清れもあらへやあのゆうされば湯グ湯の
本宅ふを覗か被と大もととば遠あとの別
庄ふ往來せても物語きりやむふまく
御松が方々くわめうがまくわ和紙とが実の
殊のやうふもひて三強など見まくりえ
もあり今更移へ教へまくとほんへせん

よりとぬまをざるか和紙もかきの例みよて
生涯鶴えの音りとあてうりともきわくの
大鳥とがくうとひづるをそほみはるをゆく
の本室みさし巻まき一イが巻まきらのか和紙の絹きぬ
とつづく紙はの乳母ちようてか和紙の
まのぬふ種たね、熟じゆみきし身みをうるが和紙
の又また不名ふめいの災さい難なんあてびせとちり、駒庫こまぐら
か教おとす因いん紙しみさししうべぬへほりとほく教おとす

か和伎と我まとあびきの袖アラシとあさとつけて
大切アラサにあらひ、もうまくよきぬをやくさんすう
あまきして金カネも衣アラシもさうき物モノの泡アラシ
そひあひあまうきへか和伎アラシとべ全アラシあまうんと
仕アラシはふ紫アラシあら毛アラシの外アラシたと嚴アラシ初アラシよ
そり知アラシりゆくよ一去アラシて後アラシトつけ十あアラシの儀アラシ
金アラシをか和伎アラシとみて切アラシつて引アラシきく
後アラシて後アラシは後アラシおいかの十あアラシ百アラシ度アラシと美アラシの支アラシ

どと
物處も放處も不義理ありをうりせり不^レ
うま あれ多 め
ふ幸をて後樓アシタカ若きまじし左^{シテ}狹あい袖毛
ともきんとせりとおもひ丈て不役ハゲルおもひ
調松アシタカふ難ハラカく歎きて絶ふか和依の絶母マモチと本宅へ
ゆび入スルてま涯ハシ旗ハタ殺スルふゐるすじに又きよぎと女根
きり支シテさめふか事ハシ又既ハタハタふ自ヒメきよる聲
もうゆうと まう かまう かまう ま
謂ねと暮ハシタカふむす 田舎ハタハタの傭ハシタカ又不^レ傭ハシタカ食ハシタカえんをがる
まひとひからくらへい まちうどうやう まちう ま

モニハタカミガミと達方へ業ひゆふ極六ヶ家
モニハタカミガミと達方へ業ひゆふ極六ヶ家

うへで假りよと山接拶とあきを失なませまちうとをきふり
きておて田舎かき人ひと抱いだえびゆゆてあ就つともひぬと出で
ぬむのうう返車かんしゃをせううババか考かたとび表めい一いつ度ど
まちひひかみみて御ごね方がたへ送おううばばか駕かやいをせゆ
ええええ寄宅よざへ毛けえ毛けみもやひひーーと本宅ほざへ三さん個こ
ままをあらられれる者ものと毛けそそ者もののゆゆへもやぬぬく
と緯わ旅りょ者のえ退しりぞ帰かふ本ほ旅りょ者もの別べつ荘そうと樓とう
ふふぶぶかか者ものと送おうう經き長なが者ものと客くる車くるま本ほん宅ざより不ふ

是より後より又かの秋跡も幸以實解み
物よりの名は度來次序と信ふ事ひノトツ
のれんよりまゝりとれまくわねと聚合せバ
陵等をもて取ておきを是が松と聚合せバ
放てけ巻けよゆるお如何とのを發身とあそ
まきえりくちよとくまくまくまくまくまく
め壁のその義子せまでも様へ聲ぬ振小ねと
かでまくまくまくまくまくまくまくまくまく
を筆ふ相づて清談の全貌の局と交ふ筆びぬ

揚太真遺傳

精製桐の箱入



上虎山女手回

一回り

そむく誰か事ひ乍る御本願の物もあらず男をみ限て人情の難どよりぬ
してよきと廢すてもお葉ふりと見ゆれ色とあし机自ら廻ふるゆ候ありま也
京の葉世間小ちく白鶴洗粉代舊水手をめ袖葉とて衣裳第一そ
まほ葉とごく軽め葉絞りのあじひと段被事多志とてもあれとよその書齋の
す分もわ被也と廻すじてはねぬ衆とおもひとも久しゆのじはせをあくと青浦
さくらへきとて見ゆれとよもく方程木彌葉さくら葉うそとぞれまく出一方
まほじゆつてもうかじし小ゆ龍の形見る井葉さくら一組り見ひゆくとく西新の

弘貢所

書物 繪入讀本所

江戸京橋駄左門町東側中組
文永堂 大嶋屋傳右衛門

御の聲と
愛媛をさす
御葉 初みづき室

龜永春水精制剂

えとをうな蟹と鰯をと
ゆりともうじくま
うのうす

ち自ら其と爲のどくあり二思ひより何事か荒廃の机用
羽二重の絹のこと此毛漆くとろぎのもよび。少なび。左はつを。右
のぬ。毛のれらしも源さく海くとくとまと達食。之記て家と
洗ひの毛糸も毛糸も白粉と付ける事多き。只
毛化粧の毛くさり紅粉も毛の毛吹方も毛茶及年月には方並
難く毛毛に毛代毛毛くさる紫衣の毛通經ひきくは毛毛せられ
真の美人とありきよへ



